慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学：どこにでもある日常空間をフィールドワークする』法律文化社、2013年
Sub Title	
Author	伊藤, 嘉高(Ito, Hirotaka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.111- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評： 近森高明・工藤保則編

『無印都市の社会学――どこにでもある日常空間をフィールドワークする』

法律文化社、2013 年

伊藤　嘉高

本書で対象とされるのは、多くの社会批評家／社会学者たちによってネガティブなまなざしが注がれてきた今日の都市的空間だ。具体的には、コンビニや大規模量販店などの消費空間にはじまり、漫画喫茶やパチンコ店といった趣味空間、フリーマーケット、フェスティバルといったイベント空間、さらには、消費装置と化した伝統空間までもが、各章で分析される（全 20 章、11 コラム）。

こうした空間は、複製されたジャンクな消費装置とメディア・イメージであふれかえっており、一見、場所固有の「厚み」を失っている――場所は、抽象的な属性の集合体として認識され消費されるだけである。コミュニティの集合的記憶が物質的に堆積されることもなく、マルク・オジェに言わせれば、「まったく新たな孤独の経験と試練」が人びとにもたらされる。つまり、人びとはすれ違いはするが出会うことはないというわけだ。

無印都市の問題構制

ところが、本書では、このように論断されてきた都市空間のありようが「無印都市」とニュートラルに名付けられ（コールハースの「ジェネリック・シティ」からとられている）、そこでの人びとの空間的営為の広がりと豊かさとがポジティブに捉え返される。編者の一人である近森高明によれば、「ジャンクな環境をネイティヴとして暮らす人にとって、むしろ“本物”は、それら消費装置の経験の連続のうちで触れられているのかもしれ」ず（p.3）、それは「『無印』化に対抗するカウンターの動きというよりも、むしろそれ自体が『無印都市』の享受の仕方の一部に含まれる動き」（p.6）である。

この問題構制の背景には、80 年代からゼロ年代にかけて展開されてきた従来の郊外化論、舞台化／脱舞台化論に対する批判がある。つまりは、いずれも「ある特徴的な街に生じている変化に、同時代の都市空間の編成原理の転換を読みとり、それをモデル化した上で一般化するというやり方」（p.11）であり、つまるところ、「どちらも既存の都市空間が、ある異質な空間の侵略によって変質しつつあるという同じ見方の別バージョンなのだ。……いずれにしても『すべてが郊外化している』という着地点が待っている」（p.12）。

この批判は、都市社会学の方法論の反省（あるいはシカゴ学派への回帰）を迫るものであろ

伊藤嘉高「書評：近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学』」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）111-118 頁

う。ここで、科学社会学における科学技術社会論（STS）で展開されてきた「領域」、「ネットワーク」、「流動体」の空間パタンの区別を導入することで、この批判を評者なりに引き受けてみたい。場所論が明らかにしているように、都市的空間は、本来的には流動的であり、ひとつに固定されるものではない。ただし、人びとがそうした迷路に迷い込まないように、さまざまなかたちで、標準化と均質化が図られ（＝視覚的な記号化）、「領域」として認識される。

そして、この領域化を実現するのが、ガイドブックや地図や標識などの「不変の可動物」の「ネットワーク」である。ブルーノ・ラトゥールのいう「不変の可動物」は、あらゆる個人や集団に伝えられ、複製されるが、しかし、その固定化された意味内容を変えることはない（詳しくは評者らがこの 4 月に翻訳出版したジョン・アーリ著『グローバルな複雑性』（吉原直樹監訳、法政大学出版局）も参照されたい）。言ってみれば、「郊外化」などの社会学の言説もまた、雑誌や教科書といった「不変の可動物」のネットワークによって、本来的に流動的な都市空間の領域化に資してきたのだ。もちろん、社会的生（gesellschaftliches Leben）は、そうした領域とネットワークのなかで新たな流動を生みだしている。

では、そうした潜在的に流動的な都市空間を人びとはどのように生きているのだろうか。そして、そうした営為を社会学はどのようにつかみ取ればよいのであろうか。ここで、近森は、その特徴をベンヤミンの「気散じ」ならぬ「身散じ」の態度として捉える。つまり、記号消費によって舞台化された都市のなかで、他者の目線を感じ個性化のゲームを繰り広げざるをえない「身体の緊張」からの脱却（＝アフォーダンスの誘発に身をまかせること）である。

> 「無印都市」のジャンクな消費装置のなかでは、身体はきわめて弛緩し脱力している。〔基本的な空間レイアウトが統一された〕コンビニのなかで、TSUTAYA のなかで、モールのなかで、私たちはとくに他者の視線を意識したりせず、まるっきり油断をしてだらしなく過ごしている。身体をゆるやかに弛緩させた状態で、全面的に調整された消費環境に、受動的に身を浸すような態度。それが〈身散じ〉の状態であり、ジャンクな消費装置は、そうした〈身散じ〉を積極的に誘発し助長する消費空間である。（p.14-5）

そして、フィールドワーカーたちもまた、客観的な観察者から脱却し、身散じの態度をとることが提案される。評者のベタな比喩になってしまうが、19 世紀パリの遊歩者が「アスファルト上の植物採集」にいそしんでいたとすれば、今日のフィールドワーカーは（近森がゾンビと呼ぶ都市生活者たちと同様に）多感覚的な「無印都市の森林浴」に出かけていくのだ。つまりは、ハードな社会調査者とは異なり、ヒューモアの態度をもって「ゾンビ的な生のそれなりの楽しさ、その意外な多様性と奥深さを、内側から、ゾンビ目線から肯定的に語ってみせればよい」（p.19）のである。ゾンビはよろめくが、それは身体の緊張によるものではない。

本書は「『都市』や『文化』についてのレポートや卒業論文を書こうとしている学生」（p.267）に向けて編集されており（もちろん想定読者は学生に限られていない）、第 2 章では、もう一人

の編者である工藤保則によるフィールドワーク指南がなされる。都市の流動についてまわる「濁り」を捉えようとしたシカゴ学派社会学の伝統を継承し、日常的な「違和感」から出発し、都市の「表面的なことやものと思われがち」な世界を「歩く、感じる、見る、聞く、ひろう、そのことによって都市の深層をとらえる」（p.27）までのプロセスが端的に論じられる。

以上の 2 つの章を踏まえ、都市のさまざまな「空間」を論じた第 3 章以下は、「ある意味、都市フィールドワークの模範演技となっている。各章のテーマは、担当者の学問的な専門分野でない場合が多い。……模範演技といっても、読者と条件はそう大きく違わないかもしれない。逆にいうと、そのことによって読者の参考になることはとても多いと思われる」（p.34）。

本書評では、紙幅の関係上、各章のテーマについて内在的に論じる余裕はない。そこで、無印都市の領域、ネットワーク、流動という評者なりの問題構制に引きつけて、時として基本的な論点は省略し、時として意図的な誤読（差異）を重ねながら、各論を読み解いてみたい。

無印都市の消費空間

第 3 章（藤本憲一）ではコンビニが扱われる。コンビニは「オートマチックなシステムであり、誰しも一歩踏み入れれば、否応なく、ある特定のパターンにはまった適応行動を強いられる」（p.41）場であるが、それは、新旧住民の対立の隙間から立ち上がった「コミュニケーション・チャネル」あり、「視線を交わすことなく社交するための翻訳装置である」（p.43, 強調引用者）。他方で、コンビニが「現代社会の暗部を隠蔽する存在」（p.50）であることも指摘されるが、この両義性は本書全体に通底する一大テーマであると考えられる。最後に立ち返ってみたい。

第 4 章（加藤裕治）で取り上げられるのは大型家電量販店だ。家電量販店は（アップル・ストアのような）「テーマ化」の対極にあり、「かなり無頓着な消費空間に見える」（p.58）。ところが、最近では、消費者の選択をさまざまに水路づけるサービスが展開されている（コンシェルジェ、スペシャリスト、カメラ女子部、POP の多用など）。「選択肢の豊富な売り場＝ゴチャゴチャの拡大とは、逆に、選びきれない顧客を増やすのではないか、という不安」（p.61）がその背景にあるという。

第 5 章（近森高明）はフランフラン（おしゃれインテリア・雑貨店）である。近森によれば、グラウンドレスなフランフランの強さは、「どこまでも表層的な印象や感想だけで成立する『おしゃれ』の次元を、そのままで持続させる仕組みの強さ」であり、顧客は「深さ志向から解放され続けること……脱力した浅い反応を許され続けること」になるという（p.74）。すぐさまジャンクに転じてしまうフランフランを介した流動的／即時的なコミュニケーションのポジティブさが描かれる。

第 6 章（木島由晶）はショッピングモールだ。施設と客の関係に焦点を当てた数多のモール論があるなかで、本論で興味を引かれるのは「安心された多様性を買いに行く」という視点から描かれる客同士の相互作用の一端である。モールのフードコートには「食事をするはずの空

間で、食事をしなくてもよい自由」があり、学食とは異なり「フードコートで奔放にふるまう人びとがいた場合、私たちは『公共のマナー』が低下している！」と、お説教のひとつも述べたくなるかもしれない。しかし、……公共性の強い空間であるにもかかわらず、他で求められるマナーを強く要求されない空間として定着してきた点にこそ、モールのモールらしい特徴があるのではないか」（p.87-8）。

第 7 章（高久聡司）で取り上げられるパーキングエリアは「ドライバーと同行者の緊張と弛緩が逆転する移動中の『オンとオフの交叉点』」（p.90）であるにもかかわらず、今日のパーキングエリアは商業施設化しており、人びとは、「自然」への解放を希求することなく、「『無印都市性』と『ご当地性』の組合せからなる独自の消費空間」（p.95）に身を委ねるという。移動そのものが目的化するなかで、他の交通手段との「移動そのものの楽しさ」をめぐる競争が展開されているのかもしれない。

無印都市の趣味空間

第 8 章（小倉敏彦）で取り上げられるのは「マンガ喫茶」である。マンガ喫茶は通俗的な理解に反して、その大多数は居場所がないから立ち寄っているのではなく、「ただ一人でいるのがなんとなく『退屈』だから、マンガ喫茶に立ち寄ってしまう……。喫茶店のような場所では落ち着かないが、誰もいない自宅にいても（帰っても）退屈である」（p.111）。薄い壁で囲まれた個室は「孤独と喧噪を共に求める人びとが最も落ち着ける空間なのである」（p.106）。

第 9 章（野中亮）のパチンコ店は、パチンコという孤立した遊戯空間であっても「お互いの領分に踏み込まぬよう無関心を装いつつも、多層的な意味のあるこの『場』の維持に協力するという暗黙の合意を取り結び、ゆるやかな自治を行っている」（p.121）。

第 10 章（田中大介）はラーメン屋だ。都市空間に異質な行列を生みだしている近年のラーメン・ブームの背景に、「データベース（情報空間）とアディクション（身体空間）を循環させる〈ラーメン〉をめぐる集合的欲望」（p.134）が読み取られる。この点は、最後に述べる無印都市の両義性を考える上で極めて示唆に富んでいる。

第 11 章（菊池哲彦）は TSUTAYA／ブックオフである。菊池によれば、郊外型複合書店は、そこを訪れる（「本好き」とは異なる）「読者ならざる読者」にとって、「複合」書店の書物は、映像・音楽ソフト、ゲームソフト、雑貨などと並列しており、「便利な情報空間」の一要素にすぎない。この「『情報空間』としての便利さこそ、だらだらと長時間留まりたくなってしまう『快適さ』の源泉である」（p.142）。

以上の無印都市の趣味空間についての論考からは、極めて重要な論点が浮かび上がってこよう。つまり、いわゆる脱魔術化論を否定する社会学的研究が示しているように、遊園地なりショッピングモールなり、人びとがわざわざある一定の場所に集うのは、他の人びとと何らかの感情を共有する（＝生の流動が交わる）コミュニタス的体験を求めているからである。そして、集うことを可能にするために、「まなざす」対象となるモニュメントなり景観が生産されてきた。

しかし、本書で描かれているように、今日の無印都市の趣味空間は視覚優位を脱しているようだ。データベース化された情報空間のただなかにありながら、人びとは（第六感とともに）五感を介した微細な（非認知的）コミュニケーションを求めて集まっているのだ。

無印都市のイベント空間

第 12 章（金益見）ではフリーマーケットが取り上げられる。フリーマーケットの客にとっては「膨大にある服のなかから、目の前にいる『なんとなくおしゃれっぽい人』が『選んで』『着ていた』ことに意味があり、それらが半額以下どころか破格な値段で買える」（p.159）。出店者にとっては「フリーマーケットに不要品を出品することによって、気持ちが楽になる。またそれらは、客にとっては価値のあるものになる」（p.161）。そうした非固定的な相互関係がフリーマーケットの発展を促している可能性が指摘される。

第 13 章（阿部真大）では音楽フェスが取り上げられる。音楽フェスの魅力のひとつは「未知のアーティストの出会い」であるが、「出会いの場所」にもなっており、「それは、同じタイプの人間が集い、その場を楽しむクラブの雰囲気とよく似ている」（p.172）。しかし、「フェス文化がクラブ文化に近づけば近づくほど、若者のためのフェスは、世代交代を余儀なくされる」（p.173）。フジロックのような「農村型フェス」では、多世代を取り込む緩やかな場所が形成されている一方、「見せる」ことに特化した「ショーケース的なフェス」にすることで世代交代を促している「都市型フェス」では、「特定のアーティスト目当ての『場所取り』が目立つし、それが『場を楽しむ』目的の参加者との間の分断を生んでしまっている」（p.174）。

第 14 章（加島卓）で取り上げられるアートフェスティバルは、専門家によって序列化されていない「並列的な展示空間をそのまま楽しむ」身散じが見られるようになっている。そうした「『つながり』によって秩序付けられている空間は、そのなかに参入していこうとする前向きな姿勢がなければ楽しめない」（p.185）。つまりは、「序列の不在を秩序付ける『つながり』は、批評を必要としない分だけライトな消費を誘発する」（p.186）のである。

第 3〜7 章の消費空間が、フレキシブルな蓄積によって用意（「差異化」）されたアフォーダンスに身をまかせている側面が強く見られるのに対して（もちろん、そこにも相互作用はある）、無印都市のイベント空間は、即興的な流れ（「差異」）を動的に形成していくなかで主客を揺らがせている側面が強いようだ。イベント空間は、さまざまな「ネットワーク」が多領域から集まり、つながることで、変容していく空間であるからであろう。

無印都市の身体と自然

第 15 章（田中大介）では、打って変わって自転車移動が織りなす（ナイジェル・スリフト流にいえば）「運動 - 空間」が取り上げられる。自転車移動の快楽とは、「徒歩交通と機械交通のあいだで分断され空白となった都市空間を、身体 - 技術 - 環境を直接的につなぎあわせるリスクのなかで浮かび上がらせる体験」（p.199）によるものであり、自転車のもつ社会的地位の揺

らぎに由来する「運動 - 空間」のスリルとリスクのポジティブさが浮き彫りにされる。

第 16 章（高井昌吏）はフィットネスクラブである。フィットネスの文化が「人間関係、あるいはコミュニケーションの場という視点から」読み解かれ、そこには、「都市部における共同体の形成や強化、あるいは他者の『包摂』『排除』が日々おこなわれている」（p.213）ことが明らかにされる。しかし、本論を読む限り、身体が商品化されたフィットネス空間では、異質なネットワークが交じり合う契機は読み取れないようだ。

第 17 章（角田隆一）は都市近郊の海浜ゾーン（湘南）だ。1990 年代初頭の湘南は「その場に“なじむ”ための準備や“背伸び”が強いられる緊張感があった」が、脱舞台化した今日では、まなざしを意識した過剰な身体のパフォーマンスが「どぎつく」感じられるようになり、「薄着・遊泳・砂浜での運動・花火などからそこそこ解放的な快楽を享受しつつ、日焼けによって海に来た証を刻印して、日常のちょっとした変化を獲得する」という「等身大の解放的な活動」（p.225）の場になっているという。

身体は、無印都市のアフォーダンスのなかで非認知的な運動感覚を働かせる要をなすものであろう。ただし、あえて「舞台」のメタファーを用いれば、観客のまなざしを意識した「舞台」は消滅しようとも、身体の運動感覚を周到に操ろうとする新たな「ウォーキングマシン」が登場しているのかもしれない。わたしたちは、そうした操作に対して、海浜に逃れ、あるいは、無印都市のなかで、さまざまなモバイル機械とのハイブリッド化によって巧みに対応しようとしている（ジョン・アーリの近刊書『モビリティーズ』（拙訳・吉原直樹監訳、作品社）も参照されたい）。

無印都市の歴史と伝統

第 18 章（越智祐子）の寺社巡礼では、「都市の周縁部である寺社空間」の「はるばるアウェー感」を演出するためのさまざまな仕掛けとともに、「異世界や仏、祈願する人びととの……無言の出会い、静寂のなかでのすれ違い」（p.238）の心地よさが描かれる。つまり、「本当は完全な一方通行でも、実際には一切他者を構わなくても、『あ、あなたも……。わかります……』といったニュアンスでなんとなく、他者を感じることができる」（p.238）心地よさである。

第 19 章（西村大志）ではパワースポットが取り上げられる。「なんでもないような場所がパワースポットとして構築され実体化され」ており、その背景には「論理的思考ばかりでは理解できない残余つまり、人々のささいな日常の願いや非合理的な思考や行動」（p.253）があることが示唆される。

第 20 章（工藤保則）は寄席が取り上げられる。落語は観客の想像力によって集合的に成立する芸能であり、「場にそぐわないものであれば笑い声でさえも、うかんでいた情景を消してしまう」「弱いことこの上ない芸能でもある」（p.259）。それは、都市風俗の歴史を背負いながらも、そのときの出演者と場によって満足感が左右される「不親切な」で満ちている。しかし、工藤はそれが偶然性による幸福感をもたらす「親切さ」であるともいう。そうした都市の本質とも

言えよう偶然性に深く迷い込ませてくれる寄席はチェーン店やフランチャイズ店のように「年中無休で迎えてくれる」（p.263）。

第 18 章以下の記述からは、「歴史と伝統」がメディア化によって平板化しているというよりは、即時的／流動的な身体の共在による非認知的コミュニケーションのために、「歴史と伝統」が作りかえられていく無印都市のプロセスの豊かさが浮かび上がる。

なお、本書では、以上、18 の章でフィールドワークが展開されているほかに、10 のコラムが用意されている。イケア、AKB48 劇場／ショップ、東急ハンズ、カラオケ、テレビ局、ストリート・パフォーマンス、マッサージ店、ラウンドワン、アニメ聖地巡礼、歴女がそれぞれ見開きで論じられ、それぞれに無印都市の時空間と経験の様相が示されている。

「オン・ザ・ムーブ」の都市社会学研究に向けて

以上、各章の厚みをかなり犠牲にしつつ、無印都市の領域、ネットワーク、流動に焦点を当てて、一通り概観した。したがって、本書の魅力を余すことなく伝えることはできていないが、旧来の「社会問題」を扱うフィールドワークとは異質な雰囲気が感じ取れたのではないだろうか。

ここで、議論を深めるために、評者が本書全体を通じて気になった点を指摘したい。それは、多くの章で、それぞれのテーマにおいて個別事例に見られるであろう主客未分化の相互作用の実態が十分に追究されることなく、個々のテーマ空間が一般化されて論じられる格好になってしまっていることだ。もちろん、これは本書の性格（学生向け）と紙幅の都合によるものである。各章末尾に用意された「もっとかんがえる」のなかでは、対象の個別性にも目を向けるように促されているように、実際には、それぞれの「テーマ空間」そのものも一様な空間ではないはずだ。時空間には重層性がある。

ただし、ここで指摘したいのは、もっとネガティブな側面だ。とはいえ、ポスト・フォーディズム型の空間の差異化などといったことではない。そうではなく、現場への権限委譲がうたわれつつも、実際には、POS システムなどのソフトウェア・テクノロジーの進化による「データベース化」によって、同一テーマ空間の差別化・多様化がデジタル状に進められている局面をどう捉えるのかである。

また、一見、フレキシブルな身散じの背景を構成する消費装置に従事する人びとのマニュアル化されたノン・フレキシブルな動き（さらには舞台裏でなされる物や情報の動きの統制）との関係も問題にされなければならない。デジタル管理によって従業員やモノの一見フレキシブルな動きがネットワークによって連結されているのだ。しかし、他方で、大規模イベントの誘導員など、一見計画に沿ってなされているように見える行為でも、実際のところは、その場その場の状況との相互作用に基づき最適とされる管理が流動的に創り出されてもいる（ルーシー・サッチマン『プランと状況的行為』産業図書）。フレキシブルな身散じを支える背景の動きもまた、脱中心化されたものになっているのだ。

いずれにせよ、こうした複雑な動きのネットワークのなかで、はじめて人びとの身散じが可能になっている。身散じのなかで、さまざまな動きが相互連結・相互依存の束となって、多くの差異化が取り払われ、人びとは複雑適応系の要素となっている。この複雑系こそが、今日の無印都市のなかで動力学的に創発する新たな「場所」なのかもしれない。

しかし、この複雑系を構成する流動が過度のデータベース化（＝ネットワーク化）によって水路づけられ管理されたフローに堕することになれば、そこにヒューモアなどないだろう。したがって、ただ「流れ」に身をまかせることのポジティブさを認めつつ、次には、偶有的な生の「流動」（労働過程）と、そうした流動性を巧みに水路づけ、乱れなき「フロー」に回収してしまうネットワーク（蓄積過程）とを見分ける必要が生まれてこよう（Scott Lash, 2010, *Intensive Culture: Social Theory, Religion & Contemporary Capitalism*, Sage）。つまりは、ネットワークと流動の「非認知的な」政治学を射程に入れた社会学の構想である。

もちろん、これは評者なりの無印都市に対する問題関心に過ぎない。何よりも、多様なリアリティをひとつのロジックに回収しようとする「平板な」問題関心に陥ることなく動的なフィールドワークを進めていくことが肝要だ。そうした意味で、本書は、学部学生はもとより、「オン・ザ・ムーブ」の社会学研究者に対しても、新たな都市社会学の理論と都市フィールドワークの方法論に向けた構想力をさまざまに喚起させてくれる良書である。

（いとう　ひろたか　山形大学大学院医学系研究科）